

獵奇王

—— 遠すぎる人びと ——

北村 想

登場人物

獵奇王

忍者

仲代刑事

女センセ

女土方・キリコ

コネコ

ウメコ

下忍 1

下忍 2

学童 1

2

3

4

5

探偵・便所バエ

獵奇娘

金持ちの社長

秘書

女刑事西野

怪盗黒蜥蜴？

### プロロオグ

縁台に座して向かい合いながら将棋を指している影がある。

獵奇王と手下の忍者。

獵奇王は腕組みをしたまま、眠っているようでもある。

ポカンとした舞台の空はよく晴れて、うららかな春の昼下がりだ。  
橋がかりを、小学生の遠足の団体が歌いながらやってくる。

♪ 遠足 遠足 楽しいな

遠い足だぞ遠足だ  
近い足なら近足だ  
短い足なら短足だ  
今日は 遠足 楽しいな  
短い足なら短足だ  
短い足なら短足だ

女センセ はい、集合。集合ですよ。ここでしばらく休憩です。  
学童たち わーい。

女センセ あまり遠くにいかないようにね。この辺で座りましょう。どうですか、皆さん、  
お空はこんなによく晴れています。遠くには緑の山々がみえますね。誰か、あの山の  
名前のわかるひとはいますか？

学童1 双子山ですか。

女センセ いいえ、違います。

学童2 力道山ですか。

女センセ 違います。古いわね、あんた。あのお山の名前は、ヒョウタン山です。

学童3 ほんとうだ、ヒョウタン山の形をしてる。

女センセ その隣が、オサビシ山です。

学童4 ほんとうだ。オサビシの形をしている。

女センセ その隣が、

学童5 オムスピ山じゃないでしょうか。

女センセ よくわかりましたね。その隣が、チンチン山です。形をみればわかりますね。

学童3 どんな形をしたらんねん。

学童1 先生、白い雲がとんでます。

女センセ ええ、ビュンビュン。

学童4 あつちのあの雲、まるで、オッパイのような形をしています。

女センセ ええ、ポヨヨヨン。

学童3 あつちの雲は、まるで、先生のオッパイのような形です。

女センセ ええ、ペタンコン。どつくぞお前。

学童4 先生、私、スマイレの花をみつけました。

女センセ まあ、キレイ。みなさん、スマイレの花コトバを知ってますか。

学童3 ツミレなら、イワシです。昨日食べました。

女センセ スマイレの花コトバは、『誠実と貞節』です。

学童2 セージツとは何ですか？

女センセ 何事にも真面目なことです。

学童4 テーセツとは何ですか？

学童3 夫以外の男とエッチしないことですよね、先生。

女センセ 貞節とは、操を守ることです。

学童3 操って何ですか。

女センセ 貞節を守ることです。

学童3 なんじゃそりや。ようするに、あちこちで男ひっかけたりしたらあかんのや。  
学童5 先生、御本を読んで下さい。

女センセ そうですね、じゃあ、何か御本を読みませうね。

学童1 先生、今日の御本はどんな本ですか。

女センセ 今日は少し難しいかも知れないけれど、北村想というひとの書いた本を読みませう。

学童3 そいつの本なら、難しくない。けど、面白くもないぞ。

学童2 どんなタイトルですか。

女センセ 『我が故郷の少年』という題名です。

学童3 どうせまた、いつもの与太噺だ。

女センセ (やさしく) 静かにね。どつくわよ。

学童3 こいつの本はたいてい、与太だつてきいたぞ。

女センセ (学童3の頭を張り倒す) 静かにしましょう。

学童1 先生、僕は静かにしています。何故なら、僕は学級委員だからです。

学童4 私も静かにしています。何故なら、淑女だからです。

学童2 私も静かにします。

学童5 私も静かにします。

学童3 僕はカニカニします。(カニの恰好してみる)

女センセ (また、学童3を張り倒して怒鳴る) てめえが、うるせえんだよ！

学童たち、3を除いて、泣く。

女センセ

(本を読み始める) 『我が故郷の少年』・北村想、第一章・・・いよいよ夏休みも終わろうとするその年の、八月の末のことである。私は・・・(と、学童たちが泣いているので) 泣くんじゃネエ！！

学童たち泣き止む。学童3だけが、泣き出す。女センセ、またも学童3を張り倒す。

女センセ

私は鉛のように思いこころひきづつて、ローカル電車の駅付近を歩いていた。私の心は故郷で、なぜあんなに暗かったのだろう。年老いてはいたが、父がいて母がいて、年の離れたまだ、未婚の妹や弟がいた。おそらく、私の心を暗くしているのは、何処ともなく現れて、寂しそうに佇んでは消える、私の少年期の幻のせいであった。それは、袖の短い学生服を着て、学生帽を目深にかぶり、何かいいたげに、私の目の前を何度も通り過ぎた。それは、決まっかけて私の愛した風景が無残に壊されている場所に現れた。彼が現れたあとに覗く風景は、もはや、私の見知らぬものばかりであった。たった十年のあいだにかくも故郷は貌を変えていたのだ。水遊びをした小川は下水道となり、タンポポを摘んだ田園にはマンションが建っていた。少年探偵団の真似をして忍び込んだ古いモートルの学校の校舎は、モダンな近代建築のデザインに姿を変え、ひねもすマンガを読み耽った貸し本屋はケーキのチェーン店になって

しまっていた。私とその風景の変わりように驚くたびに、私の少年は幻となって現れ、そして消えた。彼は、故郷に捨てられた子供のようには思えた。故郷を捨てたとばかりおもっていた私は、逆に故郷に捨てられてしまった私の幻を心の中に育んでしまったのだ。私の故郷は明るい待ちに姿を変えた。しかし、私の少年の幻は、私の故郷の夜からやってきて、夜にもどっていく。それは消えてしまった風景の唯一存在をゆるさるる、夜の国であった。

女センセが本を読んでいる間に、学童たちは、ひとり、二人と去っていき、誰もいなくなってしまう。

女センセ・・・文学ねえ。この作者にはめずらしいことですね。あら、みんな、何処へいつちやったのかしら。○○くん、○○さん、何処ですか。何処にいますか。変ね。おーい、おーい。何処へいったの、みんなく・・・

溶暗

1.

路地裏。縁台で向かい合って将棋を指している二人がある。  
猟奇王と忍者。

忍者 大将、はよ、指しなはれや。大将、大将。

猟奇王 (寝てる) スー、スー・・・zzzzzz。

忍者 大将、寝てまんのか。

猟奇王 ハッ・・・ああ、いや寝てはおらん。考え事だ。わしの番か。

忍者 さつきから、ずっと考え込んで、なんど、ええ手でも思いつきましたか。

猟奇王 手などないわ。(指す)

忍者 (すかさず指す)

猟奇王 (腕組み)

忍者 また考え事でつか。将棋の手を考えてまんのか、他のこと考えてまんのか、それも寝てまんのか。大将はようわかりまへんな。

猟奇王 将棋など、考えなくとも指せる。

忍者 また、そんなでまかせいうて。

猟奇王 (指す・持ち駒を打って、いきなり玉将をとったらしい) どうだ、これで、わしの勝ちじゃ。

忍者 ちよつと大将、そんな手ありまっかいな。

猟奇王 王将、とつたぞ。

忍者 そんなもん、いきなり、持ち駒打って、いっぺんにわたの玉(ぎよく)とってどないしまんの。いったん、盤に打って動かしてからやないと、あきまへんがな。

猟奇王 奇襲作戦はないのか。

忍者 そんなもん、ルール違反でんがな。そんなんアリやったら、誰でも勝てまんがな。

獵奇王 不憫なもんよのう。

忍者 どこが、不憫や。

獵奇王 駒が泣いている。

忍者 泣きまつかいな、そんなことで。

獵奇王 そんなら、こう、打つか。(持ち駒を打つ)

忍者 (すかさず指して) 大将、わて、さっきから気になってまんやけど、いうてよろしでつか。

獵奇王 なんじゃ。

忍者 大将の玉(ぎよく)、何処にありまんねん。

獵奇王 ギョクとはなんじゃ？

忍者 王さんのことでんがな。大将の玉、盤の何処にもないようにみえるんですけど。

獵奇王 わしの王なら、ポケットにしまつてある。

忍者 そんなことしてどないしますのん。出しなはれ、盤の上に。

獵奇王 出さねばならんか。

忍者 あたりまえでんがな。王さん、ポケットに入れて将棋指すヤツおりまつかいな。

獵奇王 安全策だったか。

忍者 無茶苦茶やなあ。

獵奇王 忍者よ、お前はユーモアがわからんのか。(玉をもどす)

忍者 ユーモアで将棋指すヤツみたい、いてまへんで。はよ、指しなはれ。

獵奇王 (持ち駒を打つ・ただし、桂馬を敵陣の突き当たりに打ったらしい)

忍者 大将、これなにしてみんのん。

獵奇王 桂馬を打ったのだ。

忍者 打つのはよろしけど、こんな突き当たりに桂馬打ったら、桂馬動けまへんで。

獵奇王 動けぬ桂馬を動かすのが、奇策というものだ。

忍者 そんなもんありまつかいな。ルール違反でんがな。

獵奇王 忍者よ、お前はユーモアがわからんのか。

忍者 ユーモアで将棋指すヤツみたい、いてまへんで、いうてますやろ。

獵奇王 (打ち直す)

忍者 (すかさず指す) へへへ、これで「詰める」でっせ。(笑う) へへへ。

獵奇王 下品に笑うな。こちらには、最後の奥の手が用意してある。

忍者 ほんまでつかいな。

獵奇王 羽生も驚く、マンガースじゃ。

忍者 そんな手あるかいなあ？(盤上をみる)

男がひとり、赤ん坊をくるんだ、おくるみ抱いてやってくる。

男 あのう。

忍者 奥の手ねえ・・・。

男 あの、ちょっと訊ねたいのですが。

猟奇王 忍者、だれぞ客のようやぞ。

忍者 マングースねえ。・・・

男 あのう、お訊ねしたいんですが。

赤ん坊がグズル。

男 おう、よしよし、よしよし。

忍者 そんな手、あるかいなあ？

猟奇王 忍者、客やというてるやろうが。

忍者 えっ？ああ、はい、なんでっか？

男 この辺に焼き肉屋さんありませんか？

忍者 焼き肉屋？さあて、焼き肉屋さんでっか。大将、知ってはりまっか？

猟奇王 焼き肉屋か。あつたなあ。

忍者 そんなもん、ありましたか。

猟奇王 あつた。

男 それ、何処でしようか。

猟奇王 この路地を抜けて、原っぱを横断して、通りに出たら、道なりに真っ直ぐいくと、銭湯がある。その銭湯を東に曲がったところに駐車場があるが、わしの記憶が正しければ、そこは、昔、焼き肉屋だった。

男 いまは？

猟奇王 いったとおおり、駐車場になった。

忍者 つぶれたんでっか？

猟奇王 かくして風景は次第に変化し、その風景の変化の重なりが状況となって、我々の認識の対象となるのだ。つまり、風景と我々の関係をわしは述べたのだ。

忍者 そんな難しいこと、誰が聞いてまっかいな。ようするに、いまはナイんでんな。

猟奇王 早い話がそういうことよ。

忍者 や、そうですわ。

男 焼き肉屋ないのか。

忍者 焼き肉、食べにいかはるんですか？

男 そうしたかったんですがねえ。

忍者 焼き肉か。そういうもん、ここんどこ御無沙汰でんな、大将。

男 他にはナイんですかねえ。

忍者 あいにく、わてら、ベジタリアンでんねん。肉は食わんですわ。

男 そうですか。それなら、しょうがないなあ。

忍者 お役にたてんで、すんまへんなあ。

男 いえ、どうもありがとうございます。(去る)

猟奇王 妙だな。

忍者 (盤上をみて) えっ？どこがでっか？

猟奇王 将棋ではない。いまあの男だ。

忍者 あれ、ミヨウちゆう名前のひとでっか。

猟奇王 アホか、おのれは。いまのあの男、奇妙だなというとるんじや。

忍者 そないでしたか？

猟奇王 年端もいかぬ赤子を抱いて、焼き肉屋を捜しに、こんな路地裏を彷徨うとは。

忍者 そういえば、取り合わせは妙でんな。

猟奇王 赤子、焼き肉屋・・・ムーン、陸軍中野学校の暗号かも知れぬ。(と、手帳を取り出す)

忍者 なんでんねん、それは？

猟奇王 乱数表じや。

忍者 そんなんで、いまの男のことが、わかりますのん？

猟奇王 わかるわけがなからう。しかし、何かやらねば、カツコがつかぬだろう。

忍者 そんなもんでつか。

猟奇王 あの男、ひよつとすると刑事かも知れぬ。

忍者 ええっ！デカでつか。ケーサツのまわしもん、犬でつか。

猟奇王 あるいは、探偵か。

忍者 探偵でつか。

猟奇王 いずれにしても、犬も犬、あれは、きつと名犬だぞ、忍者。あの男、あんなふうな恰好をして、わしらの動向を探っていたのに違いないわ。

忍者 ほんまでつか。

猟奇王 この猟奇王の嗅覚と勘が信じられんのか。

忍者 いや、信じませ。なんやオモロなつてきよりましたな。

猟奇王 赤子に焼き肉屋か、ハッハッハ、なかなかの暗号だな。

忍者 そんなもんでつか。

猟奇王 赤ん坊が焼き肉を食うわけがなからう。

忍者 そないでんな。

猟奇王 ハッハッハ。

忍者 で、それは、どないな暗号ですねん。

猟奇王 だから、赤ん坊が焼き肉は、食わんと、そういうことだ。禅問答よ。

忍者 マリリン・モンロー。まあ、ええわ。将棋、大将の番でつせ。

猟奇王 赤子に焼き肉屋とは、ふっふっふ。のう。

忍者 大将、はよ、指しなはれや。

猟奇王 赤子に焼き肉屋か。ふっふっふ。ハッハッハ。のう。

忍者 大将の番やいうてますやろ。そのハブたらマンガースたらいう、奥の手をみせとくなはれ。

猟奇王 よし、みせてやるわ。これでどうじや。(と、相手の金を逆に向ける)

忍者 ひとの駒、わたの金をサカトンボリに向けてどないしまんねん。

猟奇王 これぞ、必死の奥の手じや。つまり、仲間割れさせたんじや。

忍者 ほんなアホな手がおますかいな。わたの勝ちでんな。

猟奇王 こんなもんで勝ち負けを決するとは、つまらぬ。

忍者 何をゆうてまんねん。将棋は将棋でんがな。勝ち負けがあるのはアタリマエでんがな。勝った勝った、大将に勝った。

猟奇王 かようなもので一喜一憂するお前をわしを軽蔑するわ。

忍者 へい、軽蔑などなんなしとくんははれ。お茶にしますか、それとも、またお昼寝の時間にしますか？なんなら、もう一局いけますか。

猟奇王 時間つぶしにも厭きたわ。

忍者 お茶にしまひよ。おーい、茶や、ちゃあ、持ってこい。

下忍1が出る。

下忍1 お呼びになりましたか、上忍さま。

忍者 青柳のお茶や。それから、明石の最中（もなか）があつたやろ。それとな、もうそろそろ夕刊の入る時間やろ。

下忍1 うちは新聞とつてませんが。

忍者 アホか、おのれは。新聞みたいなもの、パクってこんかい。いつてこい。

下忍1 ははっ。（去る）

猟奇王 忍者、下等な犯罪に走るのはよせ。

忍者 ほんなことというて、大將が、昼寝ばかりしてはりまっさかい、わてらも暇にまかせていろいろ生計をたてるために、シヨンベン犯罪やつてんのでんがな。こころで一発、世間をアツといわせるような犯罪をやらんとあかんとちゃいますか。猟奇王のこと、忘れ去られてしまいまっせ。

猟奇王 わしらのことなど、とおに忘れられておるわ。

忍者 そんなこといわんと。なんぞ、とほうもない、えげつない、いまわしい猟奇犯罪を計画してもらわんと、わての甲賀流忍法も泣いてま。

猟奇王 そんな計画など出ぬわ。なにかもマンネリだ。手を変え品を変え、オリジナリティを出そうという不毛な努力は、偉大なるマンネリの前にはついていってしまう。ここ二十年というものの、『水戸黄門』の前になんかドラマも消えていつてしまっているではないか。オリジナリティなど、宇宙開闢のインフレーションのときに、全て出尽くしたのよ。

下忍1、下忍2とともにどつてきた。

下忍1 明石の最中とお茶と新聞です。

忍者 おう、早かったな。下忍2はなんかパクってきたか。

下忍2 はい。今宵の晚餐に、カップヌードルを。

忍者 そら、ええな。

猟奇王 チッ、またあのパルプのようなラーメンを食うのか。

忍者 文句いうてる身分やおまへんで。

下忍2 カップけつねうろんもパクってきました。

忍者 よし、でかした。

猟奇王 どっちにせよ、パルプに変わりはないわ。

忍者 お茶と最中はそこに置いておけ。大將、新聞読まはりますか。



猟奇王 そのような、社会人の講読する気(け)のぬけた読み物、誰が読むか。

忍者 これでも、なかなかオモロおまつせ。地道にこういうもん読まんと、社会に取り残されてしまいまんがな。(新聞を読みはじめ)

猟奇王 誰が社会に取り残される。社会などどづくに捨てておるのに。

忍者 捨てたんやのうて、捨てられたんやおまへんか。

猟奇王 そうよ。いまや、猟奇犯罪など、大人のすることではないのだ。頭のネジのとんだ少年の白昼夢の中にしか存在せんのだ。

忍者 そやから、一発、そのボケた大人の連中に喝を入れてやるような犯罪を、計画しとくんなはれ、いうてまんのや。

猟奇王 計画というコトバはわしの辞書にはないわ。つねにアドリブとインスピレーションがわしの行動力だ。

忍者 (最中食べつつ新聞読みながら) ほほう、なかなかオモロイ記事がおまつせ。

猟奇王 猿が人間を襲ったとか、蜂にさされてショック死したとか、そんなんは、聞くだけ損、読むだけ無駄だぞ。

忍者 遠足の最中に、引率の女教師が行方不明やて。こっちは、やや、ハテナ第三の秘宝が日本で公開。

猟奇王 遠足か。もうそんな季節か。遠足といえば、いまさつき、わしは夢をみた。不思議な夢だった。そういえば、遠足というやつには、いまわしい思い出がある。聞くがよい。あの頃はわしも少年で、遠足とやらに参加しておった。

忍者 (相変わらず新聞読んで最中食って、お茶をすすっている)

猟奇王 わしは母親が作ってくれた巻き寿司をひとりで食べた。ちようど、その昼のことだ。違う組の子供がカメラを盗まれたということや、口が耳まで裂けていた女をみたという話が出た。そんな話題の中、わしはひとり、仲間に入ることもなかった。学校に帰ってから先生がいった。口裂け女をみたひとは手をあげなさいと。誰の手もあがらなかった。わしの手だけが自然にあがった。わしはいちばん低い声で、女のことを発表した。家に帰ってから、女などほんとうは一つもみなかったことを、便所の神さんだけに話した。

忍者 ハテナ第三の秘宝か。ふむふむ。

猟奇王 忍者、お前、いまのわしの独白、聞いとらんかったな。

忍者 ドクハク。口から毒を吐いたら、そら、化けモンでっせ。

猟奇王 もう、ええわい。

忍者 大将、このハテナのお宝、いっちよ、いてこましたら、どないだす。

猟奇王 フン、そんなもん。

と電話のベル。

下忍1 上忍さま、電話のようです。(携帯を出して渡す)

忍者 おう、お前ら、まだいたんか。感心やの。

猟奇王 ようも、飼いならしとるな。

忍者 へえ、もう、こいつら、わての飼いならしてる犬とおんなじですわ。おい、下忍1

猟奇王 1・2とは、名前もないのか。

忍者 へえ。おい、お前ら、そこで、犬やってみせてみい。

下忍1・2 はい。(犬をやる)ワンワンワン。

忍者 どないです。

猟奇王 悲しいのう演劇は。

忍者 こいつ、また女房に逃げられよりましてん。ヒヒヒヒヒ。

猟奇王 電話、待たせてんのんとちがうか？

忍者 ああ、そやった。はい、もしもし、待たせましたな。こちら猟奇王のアジトでつけ

ど。借金の催促なら金なんかありまへんで。えつ、大将でつか、いてはりますけど、どなたさんですか？代われればわかる？さいでつか。大将に電話ですわ。

猟奇王 なに、わしに？チッ、このような忌ま忌ましい小型電話、誰が発明したんじや。

・・・もしもし、

—— 猟奇王、ひさしぶりだな。

猟奇王 むむ、その声は！

忍者 誰でんねん？

猟奇王 わからん。誰や、お前？

—— ハテナ第三の秘宝のニュースはみたかね。

猟奇王 話には聞いた。

—— ならば、話は早い。君に会うのを楽しみにしているよ。それでは。

猟奇王 何。待て、待てい・・・キレた。

忍者 誰からですねん。

猟奇王 あの声、聞き覚えがある。待てよ、さっきのあの奇妙な男・・・赤ん坊に焼き肉

屋・・・これは、むむむむむむむ。

忍者 おつ、ひさしぶりに大将の脳が活動してる。

猟奇王 このストリングは(と手帳を出して) 0010925402417011411

270。このストリングをこっちの表に対応させると、1284341013411

474022192。これを五十音に置換すると『くろとかげにこようしん』くろと

かけ・・・くろとかげ・・・怪盗黒蜥蜴のことか。『こようしん』とは、あの奇妙な男、

わしに忠告をしたつもりか。

忍者 すると、いまの電話は。

猟奇王 おそらく黒蜥蜴からだ。

忍者 用件は、なんだす？

猟奇王 ふっふっふ、いわずと知れたことよ。

忍者 なんでんねん。

猟奇王 ふっふっふ。

忍者 大将、ほんまにわかってまんやろな。

猟奇王 見損なうでないわ。わしも日本の猟奇王だ。蛇の道はへびよ。同じ穴のムジナリ

ブズデアよ。キノクニザカ イズ ロングスロープ イン トーキョーよ。

忍者 ほんで、なんでんねん。

猟奇王 誰ぞ、黒蜥蜴に金借りたんとちやうか？

忍者 やっぱり借金の督促でつか。お前ら、身におぼえあるか？

下忍1・2 (首を横にふる) 滅相もない。

猟奇王 違うのか。

忍者 あては、なんや違うような気がしまっせ。

下忍1 私も上忍さまと同じ考えです。

下忍2 私も同意見です。

猟奇王 うーん。

忍者 悩んでどないしまんねん。黒蜥蜴から電話までかかってきたのに。せつかく猟奇事件が起きかけてまんに。知りまへんで、もう。

猟奇王 うーん、紙くれ。

忍者 メモでつか。

猟奇王 ババや。わしなあ、ババしとなってきた。うんうんきばって考えてたら、ババしとなってきたわ。

忍者 しゃあないなあ。(新聞紙を渡す) トイレットペーパーきれてまんねん。これで拭いとくなはれ。

猟奇王 よし、ちよつといつてくるぞ。

忍者 かなわんなあ。こんなときにババこくやなんて。

下忍1 上忍さま。

忍者 なんじゃ。

下忍1 誰ぞ、このアジトに潜入しようとしている者がおります。

忍者 なんやと。で、数は？

下忍2 三人です。

忍者 うーん、三対三か。大将はババこいとるしなあ。

下忍1 上忍さま。どういたしましょう。その三人、表のドアの前までやってきた様子でございます。

みると、土方姿の娘さんが三人、立っている。

下忍2 どうやら、女のようですが。

忍者 なに、女か。ほなら、勝てる。

下忍1 上忍さま、ケンカですか。

忍者 わからん、ケンカになるかもしれへんさかいに、お前ら、どこぞに隠れとれ。合図したら、出てこい。

下忍1・2 はっ。(身をひそめるふう)

三人組 たのもゝ、たのもゝ。

忍者 誰や知らんけど、入ってきさせ。

土方1 たの申す。

土方2 たの申す。

土方3 申すもうす。

忍者 お前ら、なんじゃ？

土方1 土方家業の鶴橋キリコと申す。

土方2 同じくコネコと申す。

土方3 同じくウメコと申す。

キリコ ツルは渡り鳥の鶴。なべづる、丹頂鶴の鶴。ハシは瀬田の唐橋の橋。お江戸日本橋の橋でござり申す。キリコは分かり易く片仮名でキ、リ、コ。キツネのキ、リンゴのリ、コモドオオトカゲのコで、キリコと申す。

コネコ 同じく鶴橋のコネコ。コネコは分かり易く片仮名でコネコ。コンチネンタルのコ、ネンネコ、コールドクリームのコで、コネコと申す。

ウメコ 同じく鶴橋のウメコ。ウメコは分かり易く片仮名でウメコ。ウメの花のウ、メロドラマのメ、コンドロイチンのコでウメコと申す。

キリコ おみかけどおりの女土方。流れ流れてワンダーホーゲルの娘土方三姉妹。明日は地下鉄、昨日は道路、マンション、鉄橋、ビルに駅、工事工事の飯場育ち。一曲唸らせてもらいます。

三人歌う。

カウちら陽気な 女の土方

誰がいったか知らないが

女三人寄おったら

たくましいとは愉快だね

ベリーリーグウッド ベリーリーグウッド

ツルハシ スコップ ダンプカー

切って くずして 掘って 埋めて

今日も 一日 たくましい

三人 よろしゅうに。

忍者 えらいのがきよったなあ。テーマにそぐわんのと違うか。おい、下忍、ちよつと出てこい。

下忍1 いよいよケンカですか。

忍者 アホ。そんな程度の低い話やあれへん。ややこしいのが出てきよったんや。テーマが無茶苦茶になりそうなんや。

下忍2 上忍さま、テーマとは。

忍者 それや、それやねんけどな。ちよつと集まれ。

みなさん、忍者を囲んで。

忍者 わてはな、獵奇王のテーマはこれやないかなと思うてんねん。それはな、少年が本質的に持つてる暗さや。

下忍1・2・キリコ・コネコ・ウメコ ふんふん。

忍者 夢やロマンやいうてるけど、要するにこれは根の暗い少年が、朽ち果てていく風景

の中に取り残されて、右往左往してもがく話や。  
五人 ふーん。

忍者 ところが、ここにいたって、土方の登場やろ。せつかく黒蜥蜴から電話きたのに、大将はババこきにいきよるし、これがロマンやろか。少年の暗さやろか。わて、悩むで、ほんま。

と、猟奇王が尻を押さえながら登場。

猟奇王 待て、忍者。

忍者 あっ、大将。

猟奇王 そいつらはアドリブだ。

忍者 アドリブ？

猟奇王 そうだ、アドリブだ。つまりこれはもうセッションの世界なのだ。わしにはわかった。わしはババこきながら、ついに理解した。この先、この話にストーリーはない。

何が現れて、誰が何をするか見当もつかん。これは実に見事な無計画の産物だ。

忍者 大将、尻、どないかしましたんか。

猟奇王 新聞紙が硬うて、尻が切れたわ。

忍者 よう、揉んでから、使わんと、あきまへんで。

猟奇王 しかし、忍者よ。わしはババこきながら、思想した。そうして、わしにはついにわかった。あの黒蜥蜴からの電話、あれはわしに対する挑戦だったのだ。ハテナ第三の秘宝を、どちらが先に手中におさめるか、競うべしとな。

忍者 そんなこと、今頃わかったんてつか。観てるひともう、誰でも知ってまつせ。

猟奇王 わしは黒蜥蜴の挑戦を受けることにした。

忍者 ええ、大将、ほんまでつか。

猟奇王 ほんまじゃ。

忍者 よう、いうた。大将、ええババでしたな。

猟奇王 ふふふ、甘いわ黒蜥蜴。わしを本気にさせるとは。我に勝算ありよ。

忍者 大将、なんど、考えがおますねんな。

猟奇王 そんなもんあるか。あるのは、ただ無計画とアドリブのセッションのみよ。先のわからん物語に思い入れは禁物よ。ただ、冷やかに走るのみよ。

忍者 それでこそ、大将や。

猟奇王 みてみよ、わしの指先を。

忍者 何がありますねん。

猟奇王 わしの指先には、新聞紙を突き破って付着したババが臭っておる。

忍者 ほんまや。爪のあいだに、ああ、臭ア。

他のひとびと 臭アッ！

猟奇王 このババ、誰かにつけたるど。

みなさん キャーッ。

忍者 大将、ババチイわ。やめなはれ。

猟奇王 (走る) ババつけたるど。

みなさん (逃げる) キャラツキキャラツ

——ナレーション 走れ、走るのだ獵奇王。月が月がみてるぞ獵奇の果てを。・・・

2

縁台に座りながら、将棋を指している獵奇王と忍者。  
別の場所に、あの土方姉妹。

ウメコ ねえねえ、私たち、ほんとにアドリブなの？

コネコ アドリブということは、予定外の、よけいな登場人物ってわけ？

ウメコ せっかく、女土方という、異常なキャラで登場したのに。

キリコ ふん、アドリブがなんなのですか。

ウメコ キリコ姉さんは平気なの？

キリコ ハッハッハーへのカップアツ。アドリブのひとつや二つに驚いては、北村  
想の戯曲世界では生きてはいけません。だいたい、私たちが土方として相手にしてき  
たのは、何なのです。

コネコ 土です。

ウメコ 地面です。

キリコ つまり、地球でしょ。

コネコ・ウメコ そうです。

キリコ この地球に生命が誕生したのだってアドリブだと、北村想は『想稿・銀河鉄道の  
夜』で書いているではありませんか。つまり、アドリブとは奇蹟なのです。

コネコ・ウメコ うんうん。

キリコ それに、私たちの仕事は何なのですか。昨日そこにあつたビルを壊し、道路を作  
る。田圃や畑をマンションに変える。町から町へと地下鉄を通して、忽然と新しい街  
を作り上げる。氾濫する河川を大河に変え、山々を万国博覧会のパビリオンに変える。  
文化だ文化だと騒いでいる市民を尻目に、私たちが行きもしないだろう文化センター  
を作るのも私たちです。私たちはこの物語を土方工事して、私たちのものにするこ  
とくらい出来るんです。嘆くことはありません。アドリブで生じた人類が、この地球に  
君臨しているように、私たちもまた、この物語の主人公になればいいんです。この無  
計画の物語そっくり、土方工事してしまえるのは、私たちだけなのです。

コネコ・ウメコ (拍手) すっごい。さすが、キリコ姉さん。

ウメコ やっぱり、二人芝居で鍛えただけあるわね。

キリコ よけいなことはイワンの馬鹿。

コネコ で、私たち、手始めに何をすればいいんでしょうか。

ウメコ どうやって、土方工事しましょう、この物語。

キリコ 簡単なことです。あの獵奇王とやらがいつていた、ハテナ第三の秘宝、それを私  
たちが盗んでしまえばいいんです。

コネコ・ウメコ (拍手) すっごい。さすが、キリコ姉さん。

と、けっぴいな女が走り抜ける。

キリコ ハツ・・いまの走り方。あれは社会人の走り方ではない。しまった、いまの話、聞かれたかもしれない。

コネコ どうしましょう、追いかけてみましょうか。

ウメコ キリコ姉さん、今夜はまだ飯食ってませんけど。

キリコ (深く考えると) よし、晩メシにしましょう。

さつさと三人行ってしまう。

また変な女が走ってくる。

女 (ポーズなんかとって) 私の名は猟奇娘よ。

その後を汚い風体の男が十手握って出てくる。

この男、便所バエという、探偵だ。

便所バエ 待て、待て君。君は社会人ではないな。

猟奇娘 私は、猟奇娘というの。ロマンに生きる少女よ。

便所バエ 猟奇おばさんと違うんか。

猟奇娘 しっつれいな。そういう臭いあなたは誰？

便所バエ 僕は探偵だ。

猟奇娘 臭い探偵ね。

便所バエ いったいこんなところで何をしている。ここは、人通りのない路地裏だぞ。

猟奇娘 だから、ロマンを求めて散歩してたのよ。

便所バエ なに、ロマンを。それじゃあ、僕と同じだ。僕は、正統の血を引く、ロマンの

探偵です。僕の叔父は、あの有名な明智小五郎探偵から暑中見舞いをもらったことも

ある沢村探偵です。僕も小林少年と文通をしたらうとして断られました。臭いから。

猟奇娘 私、毎日が退屈ではないの。ディスクにいつでも酔えないし。

便所バエ 僕もジャスコで買うディスクは嫌いだな。

猟奇娘 あなた、これから何処へ行くの？

便所バエ 怪盗黒蜥蜴が日本に上陸したという噂があるので、そいつを捕まえてやろうと

思っているのです。

猟奇娘 先に、お風呂に行ったほうがよくない。

便所バエ 風呂は、去年入ったから、今年はまだいいんです。

猟奇娘 でも、臭いわねえ。

便所バエ 僕は、どうもハテナ第三の秘宝が臭いと睨んでいるんです。

猟奇娘 臭いのはあんたよ。

便所バエ きつと、猟奇王も出てくるに違いありません。そうだったら、叔父の沢村探偵

と力を合わせて一網打尽です。実は、僕は、ある会社の社長に雇われたんです。その

金持ちこそ、ハテナ第三の秘宝の所有者なのです。

猟奇娘 まあ、探偵対怪人の対決ね。じゃあ、私も、そこへ行こうかしら。  
便所バエ お互い、ロマンを満喫しましょう。

猟奇娘 どうでもいいけど、あんた、ほんとに臭いわね。

便所バエ 僕の武器は、この銭形平次タイプの十手と、反吐ゲロを浴びせることです。

猟奇娘 反吐ゲロを？

便所バエ 僕は反吐ゲロを自由自在に吐くことが出来るだけでなく、いったん吐いたそのゲロをもっぺん、すすって飲むこともできるんです。

猟奇娘 そら、臭いわ。

二人、去った。

ところへ、卓袱台をせっせと運びながら、土方姉妹がもどってくる。

卓袱台には、食事の用意が整っている。

キリコ さあ、晩御飯をいただきましょう。

コネコ でも、なんだか、ここ、臭くありません？

ウメコ ゲロとか、反吐の臭いがするけど。

キリコ 一応、消臭スプレーをしておきましょう。(する)

キリコ さあ、食べるわよ。

コネコ でも、ここ、余所のお家じゃありません？

キリコ いったでしょ、そんなことイチイ構ってちゃ、私たちの存在価値はなくなるって。私たちは、風景を略奪して、状況を突破し、関係を変えてしまうのよ。それがア

ドリブとしての土方なの。

ウメコ そうか、それなら、安心して食べられる。

キリコ あんたは、あんまり安心して食べないほうがいいわよ。

キリコ・コネコ・ウメコ いただきまーす。

食い始める。

と、とぼとぼと、逆の方向から、歩いてきたのは、かつての学童1と4だ。

学童4は腹が大きい。

学童1 ああ、今日も徒労に終わってしまったか。僕たちの前から姿を消してしまった女  
センセを捜し歩いてはや十数年。僕たちは自分の持ち金をすっかり競馬でスレルほど  
に成長してしまった。うーん、今日も本命穴馬ともに来ずか。

学童4 おまけにおなかの中には子供がひとり。私たち子供だったのに、子供までつくっ  
ちやった。

学童1 それも、これも、過ぎ去って流れていった歳月のせいだ。時よお前は悪魔か鬼か。

ああ、女センセは何処に。

学童4 ねえ、クラス委員、私、質問してもいいですか。

学童1 なんですか。副委員。

学童4 私たち十数年、こうやって馬券を買い、子供が生めるような年頃になった今日ま



で、行方不明の女センセを捜してきました。でも、最近思うのです。私たち大きな間違いをしてきたのではないだろうか。まず、場所です。確かに年月は十数年、時間は充分すぎるくらいにかけました。でも、場所はたったひとつだけ。この路地裏ばかり行ったり来たり。十数年の間、捜した場所はここだけ、この路地裏だけ。これ、間違っていないかったでしょうか。

学童1 では、何処を捜せというんです。ケーキのチェーン店や新築アパートのゴミすて場にも、女センセの運動靴が片方、落ちているとでもいうのですか。バカな。そんなリアルなことがあつてたまるもんか。君のいつてることは例えていえば、こうです。映画館の客席で落とした百円玉を、そこは暗いから明るいロビーで捜しましょう。この路地裏でいいんです。ここで見つからず他にみつかる女センセなど、ニセ者です。

学童4 分かりました。ついでにもうひとつ。

学童1 まだあるんですか、疑問が。

学童4 女センセは、ほんとに消えてしまったんでしょうか。ほんとうは私たちのほうが、女センセの前から姿を消したんじゃないんでしょうか。それを勘違いして、私たちは女センセを捜すことで、私たちのアリバイをつくろうとしているのではないんでしょうか。

学童1 なんのアリバイです？

学童4 私たちの少年少女時代の、不在証明です。失ってしまったものへの言い訳です。

学童1 そういう哲学は、どうでもいいんです。いずれにせよ、女センセを捜さねば、それが僕たちの使命なんです。運命なんです。

学童4 わかりました。ともかく、帰って御飯にしましょ。私、もうおなかペコペコ。

学童1 そんなに膨らんでいるのに、ペコペコとはなあ。

学童4 あら、私たちの家庭に誰かいらっしやるわ。

学童1 なんだって、僕たちの団欒と憩いの巢に、ややや、誰だお前ら。

女士方たち、飯を食ってる。

学童1 何もんだ君たちは。ここをクラス委員と文学少女の日常生活空間と知っての狼藉か。

キリコ ねえ、私たちどちらがいいと思いますか？

学童1 どちらって？

キリコ いえ、あなたが、何だ君たちはとお訊ねになったから、私たち、それにお答えしようと思うんですが、ちょっと決めかねてるんです。

学童1 何を？

キリコ ですから、私たちの名前。キャラのネーミング。

学童4 クラス委員、お客さんですか、この方たち。

学童1 そうだ。招かざる客だ。

学童4 マネカザルって、どんなお猿さん？

学童1 君、この状況で、そんな冗談いえるなんて、いい度胸してるな。

キリコ どっちにしようかなあ。

学童1 だから、何をどちらにするんですか。

キリコ 私たちのことですか。

学童1 他に誰がいる！

キリコ すいませんねえ、怒らせちゃって。

学童1 何者なんだ、お前たち。

学童4 ねえ、この方々、イタチなんですか。

学童1 イタチ？

学童4 いいませんでした？お前イタチだって。

学童1 ……

キリコ それがね、私たち、土方をやってるんですが、

コネコ 私たちの名前、女土方にするか、

ウメコ 娘土方にするか、

キリコ・コネコ・ウメコ 迷ってるんです。

学童1 女土方も娘土方も一緒じゃないですか。

キリコ でも、ちよつとアナウンズが。

学童1 ニュアンスですか。

キリコ そう、それ。

コネコ 女土方だと東映映画ですが、

ウメコ 娘土方だと松竹映画でしょ。

学童1 どっちもあんまり変わりませんよ。一発あてたら、あとは同じ映画ばかり作ってんですから。

キリコ そうかなあ。

コネコ いっそ、お子様土方にしましょうか。

ウメコ あ、それ、可愛くていい。

学童1 どうでもいいんです、そんなことは。それより、僕は、現在ここで行為されてい

るこの事態の説明がしていただきたい。

キリコ ごちそうさまでした。

コネコ ごちそうさまでした。

ウメコ ごちそうさまでした。

学童1 ごちそうさまだと！

学童4 ねえ、どの方がお地藏さまなの？

学童1 ……うーん、ようするに家宅侵入罪じゃないか、お前たち。

学童4 やっぱりイタチがいるの？

キリコ いいんです、これアドリブですから。

学童1 アドリブ？

キリコ 御存知ありませんか。

コネコ アドリブ。

ウメコ アドリブ。

学童4 骨つきの焼き肉かしら。

キリコ さあ、飯も食ったし、お暇しましょうか。

コネコ そうですね。お茶もいただいたし。

ウメコ 充分よねえ。

学童1 どういうことだ、アドリブって。

学童4 ですから、委員、こういう、ほら、骨がついてる肉で、焼き肉屋さんにはら。

キリコ アドリブで入ってきたものが、アドリブで出ていく、それだけのことですから。

では、ハイチャ(去る)

コネコ ンチャ。(去る)

ウメコ バイチャ。(去る)

学童1 去ってしまったか。

学童4 委員、御飯をどうしましょう。

学童1 しょうがない、焼き肉でも食いにいくか。

学童4 そんなお金ありませんよ。

学童1 あいつらみたいにな、食うだけ食って逃げればいい。

学童4 無銭飲食するんですか。

学童1 ああ、焼き肉が食いたくなってきた。君が空腹の僕を前にして、スペア・リブの

話なんかするからだ。

学童4 ああ、あれ、そうか、ふんふん。

と、土方たちもどつてくる。

キリコ あのう。

学童4 あら、もどつてらした。何でしょう。

キリコ 便所かしてもらいます。

キリコ、コネコ、ウメコ、どかどかと、奥へ消える。

学童1 なるほど、食ったぶん出そうということか。

キリコ (もどつてきて) あのう。

学童4 何ですか今度は。

キリコ 今晚ここで泊めてもらいます。悪しからず。

学童1 引っ繰り返る。学童4は、ヒラヒラする。

3

路地裏の縁台で将棋を続行中の猟奇王と忍者。

猟奇王 聞いておったか、忍者。あの連中のくだらぬセリフのやりとりを。所詮はその存在自体がアドリブよ。とはいえこの物語は、すでに遠く文学を離れておる。

忍者 大将、なんぼ馬券が外れたからいうて、この作品の文学性のなさをボヤカンでもよろしやおまへんか。

猟奇王 ふん、演劇の文学性など、演劇の文学に対するコンプレックスというに等しいわ。

文学性など少女の恥毛のようなもんよ。

忍者 いまの比喩、ようわかりまへんけど。

猟奇王 単なるシニールよ。

忍者 どうでもよろしいけど、大将の番でっせ。

猟奇王 ふっふっふ。今度はわしの勝ちのようだな。これで詰みだ。(歩を打つ)

忍者 なにしてまんのおん、そら、大将、打ち歩詰めでんがな。ルール違反でっせ。

猟奇王 忍者よ、よく聞け。本来わしらの存在自体がルール違反のようなものなのだ。

忍者 そんなで、なんでんのおん。

猟奇王 ルールを逸脱しておる者が、何故にルールにこだわる。

忍者 無茶や。別の手指しとくんははれ。

猟奇王 やっぱり、あかんか。

忍者 あきまへん。そんなことより、ハテナの秘宝をいただく作戦はでけたんですか。

猟奇王 万全よ。アドリブと無計画のわしも、今度ばかりは、プランをたてたわ。

忍者 先方の金持ちの社長は、仲代刑事にガードを依頼したらしいでっせ。

猟奇王 何、あの県警随一の名刑事といわれている仲代か。面白い。相手にとって不足なし。忍者、耳をかせ。

忍者 へいへい。

その仲代が、コートを翻して、現れる。

仲代 路地裏か。突然現れる殺風景なこの佇まいは、何かに似ていると、思っていたが、

これは日々壊されていく故郷の風景の姿と生き写しではないか。しかし、その故郷の風景にも似て、妙に心を騒がせ、また鎮静させる、この安らいだ感覚はいったい何なのだ。耳を澄まして聞いてみれば、そこに聞こえるのは、振り返れるほどの人生を生きてきた、人間たちの溜め息ばかりだというのに。殺風景か。なるほど、これはひとつの風景殺害の現場かも知れぬ。だがしかし、妙よなあ。この風景は殺されてはいるが、死んではいない。

まるで悟りをひらいた一匹の老いた去るのように、静かに諦念の息を吐いている。路地裏か・・・ふふふ・・・ひとがこのような風景の前につい足を止めてしまったがるのは、ひとの心のうちにもこれと似たような風景があるからなのかも知れぬ。それはダムの水底に沈んでしまった古の村落のように、目にはみえぬが確かに存在する暗い風景として、人々の心に眠っている。

と、女が現れる。同じようなコートを着た、小さな女が。

女 仲代刑事、独白はおすみになりましたか。

仲代 独白か。独り、白くなっていた。早い話が白けていたのだ。この風景を、このうら

ぶれた風景を、何とか文学的に表現しようと努めている、そんなおのれに独り白けていたといつていいだろう。西野刑事、君は、小便でもしていたのか。

西野 いいえ、おそらくこの路地裏は、猟奇王の逃走経路となるに違いないと、そう算段して、ここいらの道筋を頭に入れておきました。

仲代 用意がいいな。

西野 仲代刑事、ハテナの秘宝に、ほんとに猟奇王は食いついてくるでしょうか。

仲代 それは間違いない。ヤツも怪人として生き残ることに必死なはずだ。ここいらで一発、世間をアツといわせないことには、怪人としての存在そのものが終わってしまう。おまけに内輪の情報では、黒蜥蜴とかいう、西洋の怪盗までが、日本に潜入しているらしい。ここで、おめおめと、ハテナの秘宝を他の者に奪われたら、日本の怪人の名が廢る。

西野 では、私たちも、そのハテナの秘宝のところへ参りましょうか。

仲代 西野刑事、君は、本来は少年課の在籍だったな。

西野 はい。

仲代 それが何故、本件の担当にまわされたか、わかるか。

西野 なぜですか。それは私も不思議だったのですが。私が子供っぽいからでしょうか。

私って、ガキっぽいから、少年課に配属されたんですよ。

仲代 ハッハッハ、そうかね。うむ、それもある。いいかね、その理由というのは、猟奇というのが、もはや少年犯罪になってしまったからだ。

西野 猟奇が少年犯罪に。では、猟奇王は。

仲代 ヤツも、暗い少年のひとりにか過ぎん。

西野 暗い少年のひとり。

仲代 そうよ。おのれの風景を殺されてしまった、哀れな少年よ。

西野 なかなか難しい話ですね。

仲代 西野くん、君は遠足にいったことがあるか。

西野 ええ、子供の頃は。

仲代 小学校のときの遠足だった。西野くん、君はチンチン山というのがどんなカタチをしているか、知っているか。

西野 チンチン電車みたいなカタチでしょうか。

仲代 いや、チンチンのカタチをしていたのだ。まさにそれは、チンチンだった。私は、やんちゃな生徒で、女センセによくしかられたものだ。そのチンチン山をみた遠足のときだ。女センセが行方知れずになった。失踪したのか、誘拐されたのか、消えてしまったのだ。しかし、いま思うと、果たしてそれは、女センセが消えたのか、私たち生徒が、女センセの前から姿をくりましたのか、よくわからないのだ。ひじょうに相対的な出来事だが、いまでも、私にはよくわからない。いったい、これは、如何なる犯罪なのだろうか。少年たちが、女センセの前から全て消えてしまうとは。これは、何を暗示しているのだろうか。

西野 それが、チンチンのカタチと、何か関係があるんですか？

仲代 単なる思い出話さ。ふっふっふ。

と、書き割りの金庫が出され、金持ち社長とその秘書（女性）とボディガードが現れる。

仲代 ついたようだな。ここが、そのハテナの所有者の豪邸か。しかし、私の目には、ここですら、殺風景な路地裏にみえる。

将棋を指していた、猟奇王も忍者に指示を与える。

猟奇王 忍者、ぬかるでないぞ。

忍者 わかってま。わかってまっけど、大将、はよ指しなはれや。（といつつ、掃除婦のオバはんに変装を始める）

仲代 県警から派遣されました、仲代です。

西野 同じく少年課の西野です。

社長 いや、これはこれは、私が、金持ちの社長です。

秘書 私、秘書をしております、秘書です。

ボディガード 私、ボディガードをしております、ボディガードです。

この秘書とボディガードは、下忍1、2の変装である。

と、飛び込んでくる、便所バエと猟奇娘。

便所バエ ど、どうも遅れてスイマセン。僕は探偵の便所バエです。

西野 探偵なんかをお雇いになったんですか。

社長 彼は、本格派の探偵らしい。

西野 警察の力が信用できないんですか。

仲代 いいではないか、西野くん。富士には月見草、ゴジラにはモスラ、ガメラにはレギオン、怪人には探偵がよく似合う。これは取り合わせの問題だ。

西野 でも、何だか、臭いですよ。

仲代 たしかに、臭いな。

便所バエ 僕の特技は、この十手と、反吐ゲロ吐きと吐いたゲロをすくって、またズズズと飲み込むことです。

西野 オエッ。

仲代 誰も、君の特技なんか聞いてない。

便所バエ うちの猫じゃないんですよ。

仲代・西野 え？

便所バエ 大屋の台所に出入りしてるのは、向かいの韓国人が飼ってる猫なんです。

西野 何の話？

便所バエ うちの猫の話です。蚤が多くて、僕は二百箇所、喰われました。

仲代 そんな話も、誰も訊ねてない。聞いてない、よけいなことは喋らんほうがいい。

西野 で、その隣の方は？

便所バエ これは、僕の友達で、ロマンを愛する猟奇娘さんです。

猟奇娘 猟奇娘でくす。

便所バエ 怪しいひとではありません。

社長 充分怪しいわ。

便所バエ その代わり、僕の最近の特技をいいますと、最近は、ストロー一本持って、駅行つて、駅の痰ツボから、痰をズズウツと吸って飲んだあとで、とろろ芋が喰えます。

西野 オエツ

仲代 聞いてないことを喋るな。・・・これで、この家の住人は全てですか。

社長 いや、まだお掃除のオバはんがおりますが。何しろ、屋敷が広いもんで。

仲代 一応、そのひともここへ。

社長 サリーちゃん。

忍者の変装したお掃除オバはん、サリーちゃんが、スカートの中に猟奇王を忍ばせて、登場する。

忍者(サリー) ヲマハリン クマヤ マハラシカラランラン、魔法の国からやってきた、ちよつとおかしな掃除屋さん、サリ〜サリ〜、お掃除オバはんサリイ〜。

便所バエ 僕の推理では、こいつが臭いですね。

仲代 臭いのは、(便所バエに) お前だ。

便所バエ (屁をひる、プ〜) ああ、すみません。

西野 臭い。オエツ。

社長 臭いわ、ほんま。

仲代 くっさー。よくもまあ、こんな雇いましたね。・・・ともかくこれで全員か。

社長 しかし、ハテナの秘宝はほんとに狙われているんですかね。

仲代 県警の調べでは、怪盗黒蜥蜴、それから猟奇王とかいう怪人までが、秘宝を狙っております。

西野 ところで、その宝は、何処にあるんですか。

社長 (秘書に) おい、秘書。宝は何処かね。

秘書 はい。(と、金庫を開けようとするが) この金庫開きませんね。

社長 そらそうや。その金庫は絵に描いてある書き割りやからな。

西野 では、ハテナの秘宝は何処に？

社長 ハテナ？

仲代 しゃれてる場合ではないでしょう。

社長 いや、ここにあるはずなんだけどな。誰か知らんか、ハテナの秘宝が何処にあるのか。

秘書もボディガードも首をひねる。

西野 仲代刑事。

仲代 ムチャクチャの話だな。まあ、しかし、それもよからう。何処にあるかわからんものを盗み出すことは不可能だ。

便所バエ あつ、社長さん。

社長 どうしたかね。

便所バエ すんません、僕の係でした。(と、引っ込んで、ハテナの秘室の入った箱の乗った机を出してくる) これ、出すの僕の役目だったんですが、忘れてました。

西野 仲代さん。

仲代 あほらしゅうなってきたな。

社長 いや、しかし、みつかつて良かった。

西野 一時はどうなるかと思つたわ。

仲代 中を拝見してらろしいですか。

社長 いや、それが、このハテナ第三の秘室というのは、みてはいけないんだそうです。

みると、一年以内に死んでしまうらしいんです。言い伝えですが。

西野 それでは、守りようがないではないですか。ほんとに、ここに入ってるんでしょうね、その宝物は。

仲代 西野くんのいうとおりですね。そのような迷信で宝の所在が確かめられないのなら、我々は、ガードの仕様がな。

社長 そうですか。では、ちよつと相談を。

社長は秘書やボデイガードや便所バエと相談を始める。サリーちゃんも仲間に加わる。

仲代も西野と何やらヒソヒソ話す。

誰も箱をみてないので、猟奇娘、その箱を開けてしまう。

猟奇娘 あらら、空っぽだわ。変ね。(蓋を閉める)

社長 わかりました。ただいま、秘書とひしょひしょ話で相談しましたが、今回は特に中をみせるということに決定いたしました。おい、君。

秘書 はい。

と、蓋を開けようとした刹那、停電したのか、辺りは真つ暗になる。

社長 やや。急に暗くなった。

秘書 つるべ落としの夕闇でしょうか。

社長 気は、それは、芝居が違う。

西野 いったいどうしたんでしょう。

仲代 これはまぎれもなく停電だ。しかも仕組まれたものだ。

と、時計が十二時を打つ。

西野 何故か時計が十二時を。

社長 十二時だからじゃないのかね。

西野 みなさん、その場を動かないようにしてください。たいてい、怪盗の予告時間とい



うのは、十二時が多いですから、ひよっとすると。

仲代 ブレーカーのある場所は何処だ。

秘書 廊下の突き当たりです。

便所バエ 僕が行きましょう。

と、暫く闇の沈黙のあと、電灯が灯る。奇怪なことに、仲代と社長とボディガードはズボンをはいていない。それどころか、不思議なことに、三人とも、艶めかしい女性用の下着をつけて、ガーターベルトで黒いストッキングをとめている姿なのだ。

例のハテナの秘宝は、箱ごとない。

社長 ない、秘宝がない。

秘書 社長！

西野 仲代さん。

仲代 あわてるな。停電して宝がなくなるなど、ありふれたパターンだ。

西野 でも、その恰好は？

仲代 こんなものは、いくらでも説明がつく。

社長 君、秘宝はどうなったんだ。

仲代 御安心なさい。仲代の目は節穴ではない。犯人なら、いますぐ捕まえてご覧にいます。

西野 仲代さん、大丈夫ですか、そんなこといって。

仲代 (その西野の腕を掴み) ヌアッハッハ。芝居はそこまでだ。西野刑事、いや、怪盗

黒蜥蜴。

社長 え？

秘書 何ですって。

社長 この女刑事さんが、黒蜥蜴？

西野 何をおっしゃるのですか、仲代さん。

仲代 ふっふっふ。我々のズボンを脱がすとは、考えたな。なるほどこの恰好では、逃げる君を追跡することもままならぬ。

西野 まさか私が。

仲代 西野くん、いや黒蜥蜴、私だまってズボンを脱がされていたとでも思うのかね。

私はズボンを脱がしにかかるその手に女を感じていた。そこで、私は私のチンチンを、その手にチョボっとくつつけてみた。すると、その手はくくつと恥じらった。まさに、紛れもなく女の手だ。それは、西野くん、君の手だ。どうだ、違うかね。

西野 ハアッハッハ。さすが、興奮きつての切れ者、仲代刑事。よくぞ見破った。しかし、私はズボンを脱がしただけよ。そんな、エロっぽいパンティなんかはかしてないわ。

仲代 これは、偶然、三人の趣味が一致していただけだ。

社長 では、あなたも。(と仲代に) 君も(ボディガードに) いやあ、こんなところで、女性下着愛好の同士にあえるとは。(抱き合う)

仲代 さて、同士の挨拶も終わったところで、西野くん、いや黒蜥蜴、ハテナ第三の秘宝

を出してもらおうか。

西野 ホッホッホ。仲代刑事、君は二つ間違っている。

仲代 何イ？

西野 まず、その一、私は黒蜥蜴ではないわ。

仲代 では、何者だ。

西野 黒蜥蜴の妹の光トカゲよ。よろしくね。

仲代 光トカゲ

社長 青春の、か。

西野 そう、私は、青春の光トカゲよ。ホッホッホ。さて、間違いの二つめ。ハテナの宝を盗んだのは私じゃないわ。盗もうとしたらもう、なかったの。テーブルの上には何もなかったわ。

社長 嘘をつけ。

仲代 いや、案外、彼女のいつていることはホントウかも知れぬ。ここにいたって嘘や言い逃れをするような怪盗でもあるまい。

社長 では、宝は何処に？

仲代 それについては、私の推理が冴える。ここに、どうも不自然な登場人物がひとりいる。

猟奇娘 私かしら？

仲代 お前は論外じゃ。これといって台詞のひとつもあるでなし、特になにをするでなし、されど、平然と、この場に出っぱなしの登場人物。・・・

みなさんの視線が、掃除婦のサリーちゃんに注がれる。

掃除婦の忍者、緊張のあまり、屁をしてしまう。

忍者 (屁、プーッ)しもた。緊張して、屁えこいてもた。

と、その臭さに我慢できず、スカートの中から、猟奇王が這い出てくる。

猟奇王 アホ、こんなときに、なんで、屁をたれるんじや。あー臭。

みなさん 猟奇王!!!

猟奇王 いかにもタコにも、猟奇王だ。

仲代 ハテナの秘宝、きさまの仕業だな。

猟奇王 わしは、まだ、何にもしとらんわ。

仲代 では、誰が。

と、便所バエが、ハテナの宝箱を手にしてもどつてくる。

便所バエ すんません、ちょっとトイレへ行ってました。(と、テーブルに箱を置く)

社長 君、その箱は。

便所バエ すんません、実はさっき暗くなったので、これは暗転だと思って、僕はこの箱

を片づけるのが役目だと、舞台監督さんからいわれてたんで、あわてて、持っていったんです。そうしたら、まだ芝居が続いているもんだから、これはいかんと思って、帰ってきました。

それぞれ、みなさん、ゆつくりズッコケる。

猟奇王 忍者、ズッコケしてる場合か。宝もん盗らんかい。

忍者 はいな。甲賀流忍法、万引きの術。(と、箱をかつさう)

忍者にススツと歩み寄る、秘書とボデイガード。

忍者 みたか、こいつらは、わしの手下の下忍なんや。宝もんはいただいたぞ。

猟奇王 でかした、忍者。

忍者 これが、実力ちゆうもんですわ。

猟奇娘 でも、その箱の中って空っぽだったわよ。

猟奇王 何？おい、忍者。

忍者 へい。(開ける) あっ、空や。何にも入っとらへん。

猟奇王 たばかったな。

社長 わしや、知らんぞ。

仲代 どういうことだ。

西野 どういうことよ。

便所バエ あの、それが、ですね。その箱の中に宝もんを入れて、小道具の準備するのは、僕の役目だったんですが、猫の餌を買ってかえることを、考えてたら、うっかり忘れてしまっ、その、箱に入れるのを。それで、まだ楽屋にあるんですが、どうしまし  
よう。持ってきましたようか。

仲代 アホかお前は。

便所バエ うちの猫じゃないんですよ。

仲代 聞いてない！そんなことは。

忍者 どないしまひよ。

猟奇王 どついたられ。

便所バエ ああ、堪忍して下さい。

とはいうものの、みなさんに、殴る蹴るの仕置きを受ける便所バエ。

そのまま、去っていくみなさん。

と、学童1と4が、卓袱台を出してきて、食事を始める。

学童4 なんだか、外が騒がしいですね。

学童1 早く食べて、女センセを捜しにいきましょう。

と、女士方たち、ヌツと出て。

キリコ そう、早く食べてください。  
コネコ 急いで。  
ウメコ 早く。  
キリコ あわててね。  
学童1 何だ君たちは、ここは、僕の家だぞ。また勝手にあがりこんできやがって。  
キリコ ここ、壊すんです。  
コネコ この家を、  
ウメコ この路地裏を、  
キリコ 壊すんです。  
学童4 クラス委員、私たちの家、壊されるんですか。  
学童1 どういうことだ。  
キリコ だって、私たち、女土方ですもの。  
コネコ 娘土方ですもの。  
ウメコ ようするに、土方ですもの。  
キリコ この路地裏を壊して、文化センターを建てるらしいんです。  
学童1 文化センター？  
キリコ でも、その建物で何が催されるか、土方には関係ありません。  
コネコ 現代演劇があらうと。  
ウメコ 前衛舞踏があらうと。  
コネコ 歌舞伎が演じられようよと。  
ウメコ 白鳥の湖が踊られようよと。  
コネコ 市民ミュージカルが催されようよと。  
ウメコ ママさんコーラスや民謡大会がやられようよと。  
キリコ 土方は、そんなものみやしません。でも、実際にセメントこねて、土を掘って、  
木材かついで、コンクリ張って、建物をおったてたのは、無名の土方なんです。  
コネコ 土方なんです。  
ウメコ 無名の私たちなんです。  
学童1 しかし、ここにそんなものが、建つなんて、いつ決まったんだ。  
キリコ アドリブですよ、アドリブ。  
学童1 アドリブ？  
キリコ そうです。私たちがこの物語の主役になるための、  
コネコ・ウメコ アドリブなんです。  
学童1 何いってんだ、お前ら。  
キリコ ですから、私たち、土方なんです。  
コネコ セメントこねて、  
ウメコ 流し込んで、  
キリコ あとをパンパンする土方なんです。  
コネコ 土方なんです。  
ウメコ 土方なんです。

キリコ 歌いましょうか、土方のブルース。

コネコ 土方のララバイ。

ウメコ 土方のワルツ。

学童1 いらん！

キリコ この物語が、少しでも芸術的であったり、文学的であったりすると、私たちは単なるアドリブで終わってしまうんです。

コネコ ですから、アドリブが単なるアドリブでなく、

ウメコ この物語世界の主役が私たちになるくらいのアドリブで、

キリコ ここをぶっ壊して、建物をおったてるのです。

学童1 無茶苦茶なやつらだ。さあ、こんなのは無視して、早いところ、女センセを捜し  
に出かけましょう。

キリコ 女センセなら、私たちがみつめました。

学童1・4 ええっ！

ウメコとコネコ、首輪をはめられて、鎖に繋がれた女センセを連れてくる。

学童1・4 女センセ！！

学童4 いったい何処に。

キリコ お嬢さん。この方は、こうやって首輪をはめられ、お宅の便所の脇に結わえられていたのです。犬のように。

女センセ ワンワン。

学童4 あっ、犬だ。

キリコ そうです。あなた方は彼女のことをずっと犬だと思っていたのです。

女センセ わんわん。

学童4 犬がいる。

キリコ そうして、この女センセを犬にみせかけて、便所の脇に繋いでおいた人物こそ、  
だれあろう、

コネコ・ウメコ (学童1を指して) こいつです。

女センセ こいつがやった。

学童1 嘘だ。

キリコ 犯罪ですね。これは、その男の犯罪です。まれにみる猟奇犯罪なのです。しかも、  
いかにも子供っぽい犯罪ではありませんか。

学童1 知らん、そんなことは知らん。

キリコ さあ、早くこの女センセとお嬢さんを連れて、この物語から出ていきなさい。

学童1 なんてことだ。話の本筋がアドリブに負けようとしている。

コネコ・ウメコ はよ、出ていかんか、こら。

キリコ まあ、しかし、私たちにも人情はございます。メシ食ったあとの、ババこく時間  
くらい、ゆるしてあげましょう。

学童4 ババしてきます。(去る)

学童1、頭を抱えてしゃがみこむ。それを女センセが軽く足で蹴飛ばす。

キリコ さて、とりあえず私たちは、勝利しました。この上は、この余勢でもって、いきには猟奇王にがぶりより、押し出して、この物語の主役になりましょう。

三人 がぶり、がぶり、がぶり、・・・(つつ、退場)

女センセ ねえ、どうすんのら。(学童1を蹴る)

学童1 蹴飛ばさないでください。

女センセ いえる立場か。

学童4 がもどってくる。おなか小さくなっている。

学童4 ああ、スツツとした。

学童1 ……スツツとしたって、君。腹の子供はどうしたんだ。

学童4 ババしようとかんだら、一緒に出ました。

学童1 そんな無茶な。

学童4 大、丈、夫。私、告白小説書くから。『私はトイレで出産した』というのを書いて、週刊誌に売り込むから。

学童1 (悩む)

女センセ 悩むなこら。(蹴飛ばす)

学童4 (一緒になって蹴飛ばす)

学童1 (もごもご、何かいつてる)

女センセ なんだって？

学童1 焼き肉食いたい。

女センセ・学童4 アホか、おのれは。

4

猟奇王と、忍者、下忍が縛られている。

鞭を持って立っている西野刑事。ほくそえんでいる仲代。

西野 (ピシッ) さあ、いい加減に改心しろ。

忍者 痛いなあ、しばくな、ボケ。なあ、大将、何でわてら、捕まらなあきまへんねん。

なんもしとらんやないですか。

猟奇王 捕まえられたあとでは、何もいえんわ。これは冤罪というやつだ。捕まえてから、そいつの罪を考えると、いうやつだ。

西野 うるさい。改心しろ。(ピシッ)

忍者 こら、青春の光トカゲ。お前、ようも簡単に官憲に寝返ったな。

西野 私は改心して、普通の社会人になっただけよ。

猟奇王 理解できぬのは、その神経よ。

西野 神経なんて、使っても疲れるだけよ。

下忍2 あ の、僕。

西野 どうしたの、改心するの。

下忍2 はい、一応、僕、妻子がありますから。

忍者 こら、お前、なんちゆうこと、いいさらすねん。

下忍1 あ の、私も。

西野 あなたも、改心？

下忍1 ええ、一応、手に職がありますから。

忍者 こんガキら、これまでの恩も忘れやがって。

下忍2 あ の、僕、これからは、まっとうに働いて、給料が貰える社会人になります。

仲代 よし、縄を解いてやろう。(縄を解く)

忍者 あっ、こら、お前ら。

下忍2 ふん、なにが、こらや。ひとのこと、何にも知らん新人やと思ってこき使いやがって。僕はなあ、もう自由になるんや。これからは、たとえ十円でも貯金のできる生活をするのんや。ほな、さいなら。

下忍1 さいなら。

仲代 猟奇王も地におちたものよなあ。手下に捨てられるとは。さて、よおく頭を冷やして考えるがいい。西野くん、私たちは、コーヒーでも飲みに行こう。

西野 はい。

仲代 それから、どっか、お風呂のあるところへでもいって、汗を流そう。  
西野 まあっ、仲代ちゃんたらあん。

去っていく二人。

と、残された二人。

忍者 アホッ、ロリコン、スベタ。

猟奇王 忍者、見苦しいぞ。

忍者 大将、ほんで、どないしまんねん。

猟奇王 知るか。

と、間のぬけたような間の時間が過ぎて。

忍者 大将、わてら、どないなりまんねん。  
猟奇王 さあな。

またも、間のぬけたような間の時間が過ぎて。

忍者 大将、この間はなんでんねん。

猟奇王 おそらく作者も、この先、どうしていいのか、わからんのよ。

忍者 そんな無茶苦茶な。

と、鈴の音がして、流れてくるフィナーレらしい音楽。

女士方を先頭に、皆さん、首には青いネクタイ、手に鈴をもって、登場。

忍者 これ、なんでんねん。どないしたんです。

猟奇王 これは、ま、まさか。

忍者 ひよっとして、これ、フィナーレちがいまっか。

猟奇王 そのようだな。

忍者 大将、落ち着いてる場合やおまへんで、芝居、終わってしまいまんがな。

猟奇王と忍者の懸念を尻目に、キリコが「本日はどうもありがとうございます」  
てな口上を始める。

忍者 ちょっと、待てこら、お前、なに様や。

キリコ お静かに。この物語、私たちが、頂きました。この後は、この無計画でポンチ絵  
のような物語、土台工事からやりなおして、ここに立派な芸術作品を世に送り出す文  
化センターを建ててごらんにいれます。

忍者 アドリブが何いうてけつかる。

猟奇王 読めた、読めたぞ、忍者。

忍者 なんてっか？

猟奇王 キリコとかいったな。お主、女士方とは借りの姿。実のところは、貴様こそ怪盗  
黒蜥蜴。

キリコ ホオッホッホッホ。よくぞ見破りましたね。さすが猟奇王。

コネコ ええ、姉さん、

ウメコ 怪盗黒蜥蜴だったの？

キリコ ええ、いまそうなったのです。アドリブで。

コネコ・ウメコ まあ、ステキ。(拍手する)

他の連中も、拍手。

忍者 大将、どないしまんねんな。

猟奇王 ふっふっふ、こうなったら、意地でもみせねばならんな、一発大逆転。

忍者 ありまんのか、そんな手が。

猟奇王 本格派でせまろうとしたが、しかたがない。ネタといえば、これぞ、ネタ中のネ  
タ。古典中の古典をみせてくれようぞ。

キリコ ほっほっほ。この期に及んで、何を見苦しい。この場から逃げられると思うてか。  
みるがいい。

と、みなさん、それぞれ、青いネクタイを剣のように構えて猟奇王たちを囲む。

忍者 げげ、社会人！



猟奇王 とりみだすな、忍者。しやらくさい。社会人も文学もわしには無縁じゃ。忍者、あれ、やったれ。

忍者 へい、わかりました。(と、するりと縄を抜けて) みたか、甲賀忍法縄抜けの術。猟奇王 (同じく、縄を抜けて) 社会人よ、みるがいい、これが、猟奇王の一発大逆転。

と、気球が現れる。

キリコ な、なんと。

コネコ・ウメコ 姉さん。

キリコ 最高のアドリブだわ。

猟奇王 女士方よ、社会人よ。猟奇王の華麗なるラストシーンをみるがいい。

忍者 ざま、みされ。

猟奇王 さらばじゃ。

忍者 へっへっへ。

猟奇王 わっはっは。

二人はおおいに笑うが、気球は上がらない。

忍者 大将、あがりまへんで。

猟奇王 わっはっはっは。

忍者 大将、これ、上へいきよりまへんがな。

猟奇王 (笑っている)

忍者 大将、大将で。

猟奇王 笑って誤魔化さんかい。わっはっはっは。

忍者 ハハハ、ハハハ、

ただ、笑っている二人。

5

あの路地裏で、縁台将棋を指しているのは、猟奇王と仲代刑事。それを傍らでみている忍者。

忍者 大将、なんと、バックミュージックでもかけましょか。

猟奇王 おう、いつものあれ、頼むわ。

すりきれたレコードが『大阪ぐらし』を小さく歌う。

仲代 ついに、路地裏からの脱出はならなかったようだな。

猟奇王 みんな夢よ。見果てぬ夢よ。かくして、路地裏だけが消えていくのよ。

仲代 おぼえているか、かつて、遠足にいった日々を。

猟奇王 さあて、そんなこともあったか。

仲代 俺にはいまだに謎なのだ。いったい、消えたのは、女センセのほうか、それとも俺たちのほうなのか。

猟奇王 それは途方もないメビウスの輪よ。仲代、聞くがいい。わしはある日、昼寝しながら夢をみた。この空を気球で飛んでいる夢をな。夢にみるということこそが、現実で不可能である査証なのだ。誰がああ遠足の日、大空に飛ぶ気球をみたらう。おそろくは、わしひとりには違いない。

仲代 いや、俺もみたかも知れん。誰も彼もがみたかも知れん。それを忘却してしまっているだけのことも知れん。

と、女センセに引率されて、学童たちの遠足の一団がやってくる。

女センセ さあ、みなさん、今日はこんなにステキな青い空の下で、みなさんの作文を発表してもらいます。クラス委員、あなたから、どうぞ。

学童1 はい。・・・ぼくの頭は大きいけれど、中は普通です。僕は今、フクロウになりたいです。僕は眠くなるけど、フクロウは寝ないでいいから、夜遅くまで勉強ができるので、宿題が全部できると思います。

学童2 幼稚園にもどりたいです。お勉強はほんとは嫌いです。幼稚園は楽しかった。なんにも勉強しなくても良かった。漢字をおぼえようしたり、計算がむつかしいと、頭が爆発しそうになります。

学童4 私は家の中で、たくさんのお魚やネコを飼ってみたいです。いまの家はマンションの十階なので、お父さんが駄目というので飼えません。だから私は、もうひとりの私が、別の家でたくさんのお魚やネコを飼ってみたい。ワルツみたいな音楽が流れて、シュークリームが出て、ミルクが出て、ネコにミルクをあげる。そんな生活がしたいです。

学童5 宿題は毎日やろうとするけど、めんどくさいし、やりません。そうじはときどきするけど、つかれるから、やりません。

学童6 (便所バエ) 僕はチータになりたい。足が早いからです。僕は足がのろくて、顔はブスです。チータのように早くなって、たかいところから、僕はひとにめいれいしてみたいです。

学童7 (コネコ) 私は一週間にひまな日が二日しかありません。補習と塾が四日でピアノが一日です。私は私の時間がほしいです。だから、私とまったくかわらない私ももうひとりほしいです。

学童8 (ウメコ) 私は足の太いのがいやです。手のふといのもいやです。お菓子をひとつ食べると、1キロ太ります。ごはんは食べません。でも、私は太ります。このままではみんなから笑われます。だから、痩せるまでひとりで遊ぶことにしました。

学童9 (西野) ずうっと頭が痛いです。いつもお母さんが私のそばにいるから、私は頭が痛くなります。私はお母さんになりたくありません。

学童10 (猟奇娘) パラシュートで天までいきたいです。空を飛んだら、きつといい気持ち

ちだと思えます。そうしていい空気を吸ったら、はなづまりもなおると思えます。

学童11（下忍2） 僕は、作文の宿題を忘れました。

学童12（下忍1） とにかく、いい気分になってみたい。いつもいい気分じゃない。いつもふつう。なんでもふつう。いつもふつう。なんでもふつう。

学童12の台詞のあと「いつもふつう。なんでもふつう」を、学童たち、声を揃えて繰り返す。

と、

学童13（キリコ） あっ、気球だ。気球が飛んでいる。

皆、それに応じて振り向き、空をみる。

学童13 先生、気球が飛んでいます。

獵奇王（ゆっくり、立ち上がると）気球だ。

仲代（目をむけて）なに、気球？

獵奇王 世界のありとあらゆる精神病と、うつとうしい皮膚病と、なおりそうもない内蔵疾患と、すべての平和のための戦争と、暗い暗い少年の旅をのせて、いつもふつうの、この空に、気球が飛んでいる。

仲代 みたかったなあ、こういう光景を。（と、しばしみているが、盤上に目をもどし、持ち駒を打つ）獵奇王、王手だ。

ゆっくりと盤上に目を移す獵奇王。ポケットから、駒を出して。

獵奇王 わしの玉は、ここだ。

『大阪ぐらし』が、流れて。

溶暗。